

第二章 修飾關係と機能範疇

修飾するといふことは如何なることであるか。修飾といふことは單に外から之を扮飾することではない。外部的に只貼附する如きことではない。内在的なものを抽出して之を外に明示する意味のものでなければならぬ。被修飾素の屬性の中、或ものを特に析出し之を客觀的に顯揚する意味のものでなければならぬ。修飾せんとする意義内容の一部を限定することではなければならない。例へば「白い月」に於て、月が具有する種々の屬性の中で特に「白い」といふ色感的屬性を抽出し、限定し明示する如きことが修飾の作用である。「圓い月」「明るい月」なども同然である。故に修飾せんがためには、修飾される要素が豫め然るべき屬性を包有してゐるといふことがなければならぬ。被修飾素が先天的に然在るものでなければならぬ。しかし包有してゐるとは言ふものの、それが始から顯現的であつては修飾機能の働く餘地はない。「明月」とか「白馬」とかといふ語を、「明るう」とか「白う」とかといふ語で修飾することは無意味である。その屬性が被修飾素に内潜的でなければならぬのである。只發現可能態として潜在してゐなければならぬのである。かゝる内潜的屬性を外顯的屬性たらしめる働が修飾作用である。しかしてかゝる言語間の相關々係が修飾關係に外ならない。故に修飾關係は從屬關係の中でも内屬的であるといふ

のである。

日本語ではかやうな修飾關係に於て、常に修飾素が被修飾素に先行する構造形態をとるのである。蓋し修飾されるものはより文法的であり、修飾するものはより觀念的であるからであらう。しかも修飾素が被修飾素に常に先行するばかりではなく、常にその直前に連接してゐるのである。所謂冠するとか挿頭すとかといふことの眞義は、右のやうな姿體をなすところにあるのである。例へば（白い）（月）、（行く）（春）、（私の）（本）、（白く）（光る）、（靜かに）（流れる）の如きものはそれである。かくて「靜かに流れる川」「僕の机の上の帽子」の如き修飾關係では

（靜かに）（流れる）（川）、〔（僕の）（机の）（上の）〕（本）、

のやうに分析しなければならず、又「ひどく彼はおこつてゐる」「直ちに西國へ落延びた」の如きものでは

（ひどく）（彼はおこつてゐる）

（直ちに）（西國へ落延びた）

のやうに分析しなければならぬ。随つて「決してそのやうな事は致しません」「必ず立派にやり遂げて見せます」の「決して」「必ず」なども、單に文末の述素だけに係るものではなく、

（決して）（そのやうな事は致しません）

（必ず）（立派にやり遂げて見せます）

のやうに、述素に支配されてゐる後續部分全體に係つてゐるものと見なければならぬ。又「あゝ、はづかしい事

を申しました」「まあ、綺麗ですこと」の如きものや「またそんな理窟を言ふのか」「だから言はぬことか」の如きものも同様、後續するものゝ全體に關係してゐるのである。

右は日本語に於ける修飾關係一般に通ずる構造形態であるが、更に之を一々具體的に見ると種々のものがあるのである。しかしてそれには、かやうな語順的形態、即ち非實質的な時間的先後に加へて、更に様々の實質的な文法的工作を施して行くのである。例へば「白い月」「白く光る」「行く春」「起きる頃」の如く、修飾せんとする先行要素の後部に對し語形變化を與へ、或は「綺麗になつた」「さら／＼と流れる」「君の帽子」「我が國」の如く、修飾素に文法語片を添接するのである。しかし文法機能の單一的なものばかりる工作を特に施す必要なく、そのまゝの形で被修飾素に冠せられるのである。例へば「あゝ、はづかしいことを申しました」「はて、こまつた」「なほ、逢つてからもよくお話しませう」「だから言はぬことか」「恰度山でも崩れるやうだ」「決してそんなことはない」「甚だ勝れてゐる」「少し劣つてゐる」「稍北」「ちよつと上」「もうちよつと上」の如きものはそれである。

以上の如く、修飾關係といふものは特有の文法形態を媒介として、修飾素が被修飾素の内在的觀念内容の或ものを抽出し顯示する言語の觀念的構造性である。修飾素が被修飾素に内屬して行く觀念語相互間の關係である。二が眞に一に歸着せんとする過程を、分析的に顯現せる言語の相關狀態である。次にかやうなことに就き今少しく詳細に考察を加へてみよう。

二

修飾關係の根本原理は修飾素が被修飾素に直接的に先行し、その觀念内容を限定し明示するにある。冠するとか挿頭すとかといふことの真相は常にかやうなことでなければならぬのである。かゝる修飾關係は一般的には語順の先後、特殊的には語形變化及び助詞の添加等の如き各種の文法形態を以て表示せられ、隨つて各種の修飾的形態は雑多な修飾諸關係を統率してゐると言はなければならぬ。しかし修飾關係の眞の決定者は實はかゝる文法形態ではなく、文法形態をも統率し派生せしめる意味の機能範疇の如きものでなければならぬ。修飾素と被修飾素との性質關係といふものが修飾關係の眞の成因であつて、之によつて各種の修飾關係的形態が使用せられ、かくて雑多な修飾關係といふものが成立して行くのである。以下かやうな方面から種々の修飾關係を眺めてみよう。

實體觀念を表示する語、即ち實體語が修飾する地位に立つ場合は、修飾せられる要素が實體語である時に限られてゐる。かく實體觀念が實體觀念を修飾するには常に助詞「の」又は「が」によつて媒介せられる。尤も「が」の方は何れかといへば古代的のもので、現代では多く「の」が用ひられるのである。例へば

私の本 君の帽子 彼の机 誰の洋服

この景色 あそこの川 あの山 この町

余の草稿 汝の父 あれに分際

いづれの山里 かしこの紅梅 をちこちの宮寺

太郎の作文 正成の戰略 利根の本流

富士の裾野 机の上 梅の花 現の夢

夢の浮世 秋の日光 鷺の佳處

一の親王 三の鳥居 八咫の鏡

往きの切符 見送りの人出 泣きの涙

の如くである。又この場合

こればかりの事 京までの道中 犬猫などのやう

誰やらの話 何かの機會 こゝだけの話

それくらゐの苦勞 名のみの交際

の如く、修飾素に對し「ばかり」「まで」「など」「やら」「か」「だけ」「くらゐ」「のみ」などの助詞を添接したものを以てすることもある。「が」は文語では

我が世 余が友 君が爲 汝が輩

なれが父 なが里 誰が身の上

梅が枝 賤が家居 淺茅が原

の如く稍々廣く用ひられてゐるが、現代口語の上では

君が代 我が國 我が輩 我が儘

駒ヶ嶽 三が津 茅が崎 三が一

の如く、成語的のもののみに見られ活動的には殆んど行はれない。古代語ではこの「の」「が」の外に

天つ神 國つ神 天つ風 現つ御神

島つ鳥 沖つ渚 邊つ權 奥つ城

ほつ枝 上つ毛野 外つ宮 遠つ國

まつ毛 をとつひ 山つみ いかつち

ぬづち みづち

くだもの けだもの 猿だ彦

手な底 手な末 手な心 ぬなと

みなと みなかみ 水な月 神な月

まなこ まなかひ やなぎ 身な代

の如き「つ」「づ」「だ」「な」などもあつた。又助詞「の」(方言によつては「が」も)を以て被修飾素の實體觀念(事と物との中、主として物の)代理をすることがある。例へば

君のの 僕のの 上のの 下のの

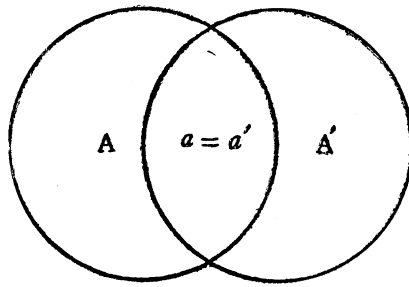
人妻とわがのふたつ思ふにはなれこし袖はあはれまされり
の如きものである。しかして更に

上の()が君の()で下の()が僕の()だ。

誰彼の()と言ふことはない。

唐の（ ）もやまとの（ ）もかきけがし……

の如く何れか一方の「の」が省略せられることもある。



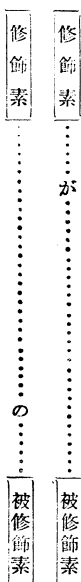
右の如く實體觀念を表示する語が修飾素として後行の被修飾素に従属

するものは、上圖の如く、實體觀念の部分と部分とが重なり合ふ觀念的交錯によつて成立する修飾關係である。十全なる從屬關係ではない。勿論補充關係のやうに外附的ではなく内屬的ではあるが、それは部分的内屬關係ともいふべきものである。それがため「私の本」「汝の帽子」「彼の説」

「牛の角」「象の鼻」「義經の鎧」の如きものでは歐米諸語の所有格のやうに、先行素が主體的とも考へられ、「梅の花」「中の宮」「上の本」「下の棚」「隣の家」「花の都」「銀の簪」「玉の露」の如きものでは、後行素が主體格であると言つたやうに考へられないこともない。しかし之は

單に、意義上然考へられるのであつて、文法的にはかゝる識別をすることは餘り必要がないのである。又例へば「我は乃といふに似て少し異也、そは梅が香と梅の香との如し、梅が香といへば梅のかた主となり、梅の香といへば香のかた主となる也」(美夫君志卷一下・五二頁)の如き考へ方もある。之も「梅が香」とすれば「梅が」は「香」に對し所有格の如きものとなり、「梅の香」とすれば「梅の」は「香」に對し修飾格の如きものとなると考へようとするのであらうが、「淺茅が原」「蓬が宿」の如きものでは、矢張「淺茅が」「蓬が」は「原」「宿」に對し所有格

的ではなく、依然として修飾格的である。助詞「が」を添加することにより主體的とか所有格的とかといふものになるのではなく、それは助詞「の」を添加した場合に比し修飾素により近接的となるといふに過ぎないのである。即ち「が」は修飾素により接近し、「の」は修飾素と被修飾素との中間、乃至は被修飾素により接近するのである。圖示すれば



の如くなるのである。随つて「+（が）」は合融的であり、後行素に對しともすれば不從順的であり、意義上却つて主從關係を逆行せしめることがあるのである。かやうなことが「の」をして益々修飾格表示の方向に走らせ、「が」をして益々主格表示の方向に走らせ、兩助詞の完全分化を庶幾しつゝ進展して來たのである。勿論、現在はまだ「の」が連體修飾格の助詞、「が」が主格の助詞などと言ひ切るところまで進んでゐない。兩者の機能は交錯的であるといはなければならぬ。しかし、その理想態可能態として然考へても差支がないのではなからうか。更に言へば「の」「が」の將來性はかやうなところにあるのではなからうか。

三

實體觀念を表示する語が修飾素に立つ場合は、前述の如く被修飾素が實體語である時に限られてゐる。しかし

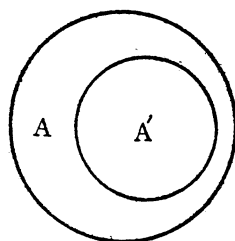
「君と僕」「山と川」「男も女も老も若きも」の如きものも實體語と實體語との相關々係であるが、之は並列關係である。即ち相關係する兩要素が觀念的交錯をなすものではなく、單に觀念的並立をなしてゐるに過ぎず、隨つて兩要素の間に介入する文法形態も著しく異なるのである。ともかく實體語は實體觀念の語以外のもの、即ち屬性觀念を表示する語などの修飾素に立つ如きことは殆んどないのである。實體觀念の語が屬性觀念の語に若し先行するやうなことがあつても、それは「花咲き、鳥啼く」「花が咲く」「花の咲く枝」の如き統合關係であるか、或は「私に下さる」「本を讀む」「下に置く」「大阪へ行く」「筆で書く」の如き補充關係である。古代語に於ける

己が身から 天地の共に 卯の花の共に

天地のむた 浪のむた 君がむた 風のむた

官のまにま 君がまにまに を鴨のまにま

の如きものは、或は從屬語に先行する實體語の修飾であるとも考へられよう。しかし「から」「ごと」「ともに」「まに」「まにま」「まにまに」「むた」「もころ」等は形式的抽象的な從屬語で、先行の實體語は、之が觀念内容を充實せしめ具體的ならしめてゐるものと言ふべく、修飾關係ではなく、一種の補充關係と考へなければならぬのである。現代口語に於ても、「花のやう」「繪のやう」「神様のやう」の如きものは矢張それである。以上の如く、實體觀念表示の語は屬性觀念を表示する語の修飾素に立つことは不可能であるが、屬性觀念を表示するものが實體觀念を表示するものの修飾素となることは容易である。この場合は觀念的交錯によつて成立する如き修飾關係ではなく



上圖の如く十全なる修飾關係である。之には種々のものがあるのである。
屬性觀念の語の中、動詞或は形容詞等の如く陳述作用の寓せられてあり語形
の變化するものは、特有な變化形態即ち連體形を以て修飾素とする。例へば

行く春 草薙る童 吹きすさぶ風 啼く鶯

引受ける人 死んだ父 捨てられた女

白い月 美しい姉 峻しい山坂 長い鼻

鳴らない鐘 言ふべき時 男らしい振舞

の如きものである。又、主として文語であるが、

一世を驚かすの事業 百折撓まざるの決心

梅花を見るの記 忘れじの行末

寝るが中 山高きが故に 重きが上の

見るがものもない

の如く、連體形の下に更に助詞「の」「が」等を添へ修飾關係を明示することがある。又

興ありの業 老いず死なずの薬もが

の如く終止形の下に「の」を添へる形のものもある。更に

印度との貿易 お使への歸り 伯母からの贈物

の如く、動詞を省略しその補格に當るものを「の」の介入によつて直ちに修飾的地位に立たせるものもある。

屬性觀念の語の中でも、副詞などのやうに陳述力もなく又語形の變化もない單なる從屬語は

稍北 少し左 ちよつと上 迥か向かふ

たつた今 もつとこつち もう少し上

たつた一つ もう一人 今一度 わづか三つ

の如き原本的な修飾方法をとることが少い。多くの場合、用言的方法とも稱すべきものと、體言的方法とも稱すべきものの二つの修飾方法がとられるのである。用言的方法といふのは文語では

いと靜かなるところ たをやかなる柳

たひらかなる岩 ほのかなるにほひ

暢美なる感情 奇怪なる振舞

偉大なる人格 切なる願

或は

劉亮たる喇叭 飄飄たる横雲

判然たる事實 燦たる陽光

の如く形式動詞「なり」「たり」の連體形に導かれ、口語では「なる」の變形と目せられる「な」に導かれ、例へば

靜かな夜 おだやかな人柄 ふつゝかな私

餘りなお言葉　かなりな出来榮　急な事

結構な品　高尚な人格　偉大な人物　妙な話

の如きものが行はれる。體言的方法といふのは例へば

尤もの話　もしもの事　ちよつとの暇

是非の用向　少しの間違　少々の骨折

聊かの事　暫くの間　わづかの旅費

遠くの親類　多くの場合　長らくの間

あはれの物言ひ

の如く「の」を介して行はれるものである。又之と略々同様のものとして文語にのみ行はれる

面白の春雨や。　心幼な業や。

口をしの事や。　あな恐ろしの物語や。

の如く、形容詞の語幹に「の」を添加したものを以て修飾素とするものがある。

四

屬性觀念相互の間にも勿論、修飾關係が成立する。しかし屬性觀念と言つても、それには種々のものがあるのである。その中現象性的屬性觀念と狀態性的屬性觀念とを先づ區別することができるのである。現象といふことと狀

態といふこととは種々に考へることができ、極く端的に言へば、前者は動態であり後者は靜態である。前者は時間的移行的存在であるが、後者は空間的靜止的存在である。故に現象性の屬性觀念は四次元的構造であるといふことができ、狀態性の屬性觀念は三次元的構造であるといふことができる。即ち後者に時性を乗じたものが前者である。かやうなことを最も如實に表明してゐる事實は、山田孝雄博士が指摘せられた（岩波講座日本文學・日本文法要論一八頁——一九頁、日本文學概論第十章照）語根を同じうし接尾辭を異にせる次の一連の如きものである。

たかし	たかむ
きよし	きよむ
よわし	よわむ
つよし	つよむ
にぶし	にぶる
しろし	しろむ
あかし	あかむ
くるし	くるむ
さわがし	さわぐ
たのもし	たのむ

即ち一方は「シ……」といふ語片を文法素としてゐるがために狀態素であり、他方は「ム……」などといふ語片を

文法素としてゐるがために現象性的なのである。かやうな文法素の相違は謂はゞ認識のカメラの相違なのであつて、そこに單なる一枚の藝術寫眞として撮るか、或は又フィルムのかきものとして撮影するかと言つた相違が生ずる譯である。かくて兩者の間に、包含所攝の關係が必然的に成立して行かねばならぬ。

現象性的屬性觀念を表示する語は言ふまでもなく種々の動詞であるが、かやうなものが屬性觀念の修飾素となる場合は、その被修飾素である屬性觀念の語が常にこの現象性的屬性觀念を表示する動詞でなければならぬ。包含せらるべき筈の狀態性的屬性觀念の語などが現象性的ものを修飾素として、自らが被修飾素となる如きことは絶対に不可能でなければならぬ。故に「有り無し」「わかり難い」「組にくい」「飢え寒し」「富み且貴し」の如く、現象性的ものが先行素となり狀態性的ものが後行素となつて、語順的に修飾關係的な形態を整へても、眞の修飾關係とはならず、多く同格的に對立してしまふのである。しかし又翻つて、現象性的屬性觀念は常に相互に修飾關係に立ち得ると言ふことはできない。例へば「光り輝く」「行き過ぎる」「咲き揃ふ」「吹きつよる」「渡りかける」「亡り落ちる」「泣き叫ぶ」の如きものでは、兩要素が同格的な並列關係に於て連結されてゐると見なければならぬ。しかも動詞相互の連結に於ては、寧ろかやうな同格的運用ともいふべきものが普通なのであつて、修飾的な運用と見るべきものは何れかと言へば特例的である。

そこで現象性的屬性觀念の語が現象性的屬性觀念の語を眞に修飾する場合は、先行的なものが形式化し、事實に於て後行的なるものよりも低次的となつてゐる場合に限られてゐるのである。先行觀念の意義内容が退化し萎縮し、その具體的生氣を失ひ、抽象化せる場合にのみ現象性的屬性觀念相互の修飾關係が成立する。例へば

あひ成る あひすまぬ あひ打つ

うち連れて うち語らふ うち破る

おしこめる おしつける おしゆがめる

かき集める かき曇る かき亂す

くり廣げる くり返す くり延べる

さしこもる さしうつむく さし出る

たち別れる たちどまる たちもどる

とり扱ふ とり亂す とり繕ふ

の如きものである。之等「あひ」「うち」「おし」「かき」……等は人によつては接頭辭の中に數へるものであつて、勿論單に接頭辭と考へらるべきものではないが、接頭辭と見られるといふことはつまりそれが形式化し抽象觀念化してしまつた動詞、謂はゞ修飾的動詞であるからである。又「國原は煙立ち立つ、海原は鷗立ち立つ」の如き「立ち立つ」では、同じ動詞でも先行素は修飾的となるのである。それはかく同一語が反復せられる場合、先行するものが自發的に修飾地位に立つのである。かやうなことが、その間へ修飾格表示の助詞「に」或は「と」を介入せしめると一層顯著になる。例へば

待ちに待つ 降りに降る もみにもむ

思ひに思ふ 鍛へに鍛へる 泣きに泣く

或は

濡れにぞ濡れし

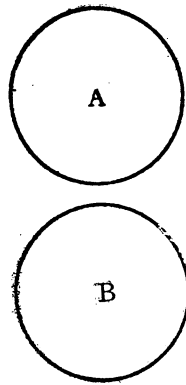
ありとあらゆる

入りと入りぬる

生きとし生ける

などの如きものである。

以上の如く、現象性的屬性觀念が現象性的屬性觀念に連接しその修飾素となる場合は、先行素の觀念内容が輕薄となり、形式化し抽象的觀念に變容せるものたることを要するのである。然らざれば常に上圖の如く並列し、同格



連用ともいふべきものとなつて修飾關係は不成に終るのである。即ち前に述べた、觀念的交錯關係によつて成立するものでなければならぬのである。即ち a' は原動詞觀念 A' の形式化せる部分であり、それが被修飾觀念 A の a に對し同一的として之を明示するところに修飾關係が成立して行くのである。

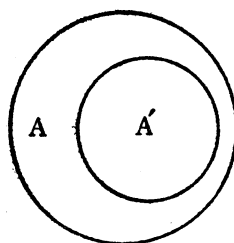
五

現象性的屬性觀念相互の修飾關係は先行素が形式化し、即ち A 觀念と A' 觀念とが a 及び a' の如き交錯的部分を成すところに成立するものでなければならぬ。しかし屬性觀念が眞に屬性觀念の修飾性となるには、先行素が後行素よりも本質的に低次的な觀念であるといふことがなければならぬ。即ち後行素である被修飾素が現象性的屬性觀念

を表示する動詞の如きものであれば、先行素は状態性的屬性觀念を表示する語でなければならぬ。そこに上圖の如

き主從的關係が成立し、眞の意味の修飾關係が成立して行くのである。以下かやうなものに就いて述べてみようと思ふ。

先づ陳述力を有し語形の變化をなす形容詞の如きものでは、その連用形を以て後行素に連接するのである。例へば



白く光る。 悪く言ふ。 早くしほむ。

長く切る。 赤く染める。 強くたたく。

戀しく思ふ。 淋しく笑ふ。 優しく教へる。

力強く人の胸を打つ。 此の上もなく尊い。

よく／＼心に刻んでおけ。

の如きもので、形容詞の副詞法などと稱せられるものである。之は修飾的連用の模式的なもので、かやうな形にあるものは決して同格連用となることがないのである。例へば「壁を白く塗る」の如きものでは「白く」は「塗る」と並列せる陳述語ではなく、「塗る」に従屬し之を修飾することによつて述格の一部を擔當してゐると見なければならぬ。「月が白く光る」の如きものでも、「月が白い」「月が光る」の如く分析すべきものではなく、(月が)＋(白く)＋(光る)の如く分析し、「白く」と「光る」とは同格的ではなく修飾的な關係をなすものと見なければならぬのである。「月が白くさやかである」「壁を白く綺麗に塗る」などの如き關係と全く異なるものである。

る。

所謂副詞は一般に單なる屬性語であるが、之が現象性的屬性觀念の語に冠せられてその修飾的地位に立つ場合は、極めて錯雜した相關々係の様相を呈する。先づ

靜かに流れる。遙かに落延びた。

のどかに晴れる。平かにならす。

暖かになつた。さわやかに述べたてゐる。

稀にある。切に思ふ。大切にする。

徐ろに口を切る。活潑に運動する。

精密に調査する。激烈に論ずる。

滑稽に躍る。優に收容し得る。

の如く助詞「に」を添へて之を修飾格の地位に立たせるものがある。又之と略々同様であるが、多少異なるところあるものに

繽紛と散る。淋漓としたる。

澎湃と打寄せる。玲瓏とかゝる。

爛漫と咲誇る。絡繹とつゞく。

茫洋と涯なし。倉皇と去る。

悠々と迫らず。颯々と吹く。

泰然と構へたり。欣然と服す。

忽焉と來る。溘焉と逝く。昭乎と輝く。

突如と現る。卒爾と物言ふ。

の如く、雙聲、疊韻、疊字、及び「然」「焉」「乎」「如」「爾」等に導かれた漢語に助詞「と」を添へて修飾格に立たせる形のものがある。かやうに「と」を添へて動詞の修飾的地位に立たせるものは、純日本語の中にも多數ある。

例へば

からりと晴れる。さつと掃き清める。

きらりと光る。さらりと流れる。

ころりと鳴る。ばらりと散る。

ぬつと出る。ぐつと締める。かつと怒る。

早々と出掛ける。廣々と寝る。

しづくと歩む。ながくと物語る。

などの如き擬音とか擬態語とか、或は反覆語等がそれである。しかし、以上のものは必ずしも常に「に」「や」「と」が添へられなければならないといふ譯のものでもない。時には

自然さうなる。奮然立つ。斷然ことわる。

からく笑ふ。 きらく光る。

きつぱり斷る。 ゆつくり考へる。

のやうに別に助詞を添へなくても差支ないものもあり、又

やをら立つ。 よくやつた。 すつかり終へた。

よくく考へてみよ。 うすく知つてゐる。

かねく聞いてゐた。 泣くく語る。

の如く「に」も「と」も全然添へない習慣のものもある。しかして「に」を添へるものは文語では「なり」、口語では「である」「だ」「です」等の形式動詞と合體して述格的地位に立つことが出來、「と」を添へるものでは漢語のものゝみが「たり」に合して述格的地位に立つことができる。

右は狀態性的屬性觀念を表示する從屬語を修飾素に立たせるものであるが、その外に

甚だ優れてゐる。 少しく劣つてゐる。

多少やれるだらう。 もう少しいけるだらう。

の如く、程度性的屬性觀念の從屬語を修飾素とする場合もある。しかしそれは極く稀である。蓋し、現象性的屬性の如き移動的にして複雑多岐なる觀念に對し、かゝる程度性的ものが容易に從屬することができないのであらう。一體、程度づけることのできるものは比較對照の可能なものでなければならぬ。しかも種々の分釋的手順を介入することなく、直ちに然爲し得るものでなければならぬ。かやうなものは現象觀念の如き複雑多岐なるものではなく、

狀態觀念の如く單視面的なものの平面的なものでなければならぬのである。故に例へば

非常に走る。 一番似てゐる。

最も勉強する。 中々やる。

の如きものはその間へ「よく」などといふ狀態觀念の語を挿んで始めて意味が落着いて來るのである。

六

現象性的從屬性觀念は程度性の屬性觀念を從屬せしめることが困難であつたが、之に反して狀態性的屬性觀念は容易に程度性の屬性觀念をその修飾素として從屬せしめることができる。それは恰も、西歐語の常敍とか比較敍とか最上級などといふ如き意味のもので、狀態性的屬性觀念に必ず附纏つて來る事實であり、隨つてその重要な性能であり屬性である。それ故、狀態性的屬性觀念の語は程度性的屬性觀念の語を從屬せしめ、之を修飾素たらしめ得る材料であると一應考へてもよいのである。かやうな狀態性的屬性觀念の語といふのは、形容詞の一連、「に」を添へる性質の從屬語の一連、並に「と」を添へる性質の從屬語の一連であるが、之等は相互に如何なる關係をなすであらうか、先づこの事から考察してみよう。

形容詞と「に」を添へる性質の從屬語とは、その表示する屬性觀念の上から言へば略々同位的なものである。故に之等は相互に修飾關係をなすことは困難であるといはなければならぬ。例へば

白く美しい。 太く逞ましい。 長くて弱々しい。

にこやかに愛らしい。早くて綺麗だ。

静かで大人しい。静かで綺麗だ。

の如く結合しても、それは常に同格的運用である。只

繪のやうに綺麗だ。こんなに大人しい。

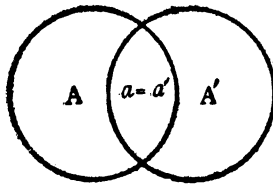
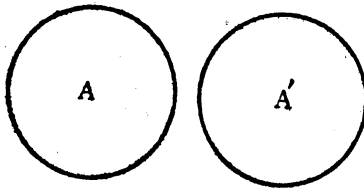
花の如く美し。かくの如く明白なり。

などのやうに先行素が形式的な形容詞とか従屬語に導かれてゐる場合、或は

遙かに早い。遙かに綺麗だ。

ひどく暗い。物すごく派手だ。

の如く、先行素が形式化の餘り程度性のもとなつた場合などは



の如くなり、觀念的交錯 $\equiv \equiv$ に於て修飾關係が成立するのである。

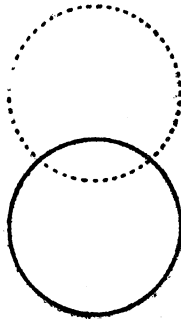
しかし之等は、「と」を添へる性質の狀態性的屬性觀念の從屬語を修飾素たらしめ得るものである。例へば

きら／＼と眩しう。　　やわ／＼と騒がしう。

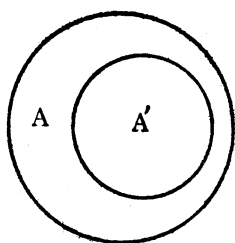
うら／＼とのだかだ。　　にこ／＼と愛らしう。

森閑／＼とものさびしう。

の如きものである。しかし、形容詞とか「に」を添へる從屬語などと、この「と」を添へる從屬語とは、狀態として映しとる態度方法を異にするものである。前者は内觀的であり後者は外寫的である。随つて映し取り得た兩者の狀態性は、それ／＼質的に異なるものでなければならぬ。故に前者と後者とが



の如く重なり合つた部分に就いては略す



上圖の如き十全な形の修飾關係が成立つが、然らざる場合は單に並列されるのみである。又「と」を添へる性質の從屬語相互の間では、修飾關係は全然不成であることは言ふまでもない。

狀態性的屬性觀念を眞に修飾するものは嚮に言つたやうに程度性の屬性觀念である。程度性の屬性觀念とは如何なるものであるか。それは廣い意味で言へば一種の狀態性的屬性觀念と見なければならぬものである。しかし殊更「に」を添へる性質のものに類似し、内面的であると考へなければならぬ。かやうなことから、例へば「遙かに」「よく」「ひどく」「僅か」の如きものは、場合によつては前者に、場合によつては後者に用ひられるのである。しかし、上述の狀態性的屬性觀念は總て内實的なものである。狀態の内容を種々の仕方で描出せるものである。然るに程度性のもものは之を形式的に度合づけ、それが觀念的となつたものである。狀態性の内容そのものではなく、その内容の程度を表示せるものである。かく言へばとて、之を量的なものと考へてはならぬ。前者が狀態性を質的に示し、之は狀態性を量的に示すものであるなどと考へてはならぬのである。量とか數とかと言ふものは絶對的のものであるが、此處で言ふ程度は比較的相對的のものである。

かやうな程度性的屬性觀念は、内實的な狀態性的屬性觀念の修飾素として之に先行し、常に十全なる修飾關係が成立して行く。例へば

頗る高い。 大變遠い。 最も大きい。

一番長い。一等短い。非常によろし。

ひどく早い。馬鹿に近い。餘程強い。

實に精密である。中々確かだ。遙かに遠い。

甚だ靜かだ。いやに緩漫だ。多少正確である。

少し變です。ちよつと短い。もつとよい。

とてもすばらしい。よりよくする。

の如きものである。右は總て、形容詞や「に」を添へる從屬語を被修飾素とするものであるが、

幾らかざら／＼してゐる。ひどくぐら／＼だ。

馬鹿にこせ／＼する。いやにのつべりしてゐる。

もつとしつかり。

の如く「と」を添へる從屬語に對しても行はれることがある。しかし、之は前者の如く觀念的に未だ十分に消化されてゐないものであり、素朴な狀態性的屬性觀念であるところから、何れかと言へば度合づけに不適當であり、随つて極めて稀にしか行はれないのである。

程度性的屬性觀念は狀態性的屬性觀念の形式的となれる形のものであり、それが主として狀態性的屬性觀念の修飾素となるものであるが、かゝる程度性的屬性觀念は更にその形式化の度合によつて相互に修飾關係を成立せしめる。例へば

たゞちよつと

ほんの少し

もう少々

今少し

やゝ少し

いと遙かに遠し

の如きものである。

七

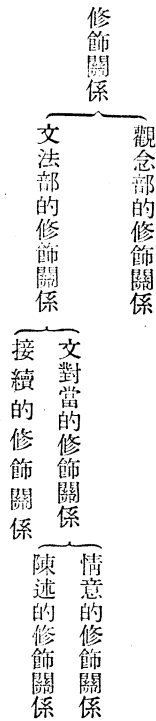
以上は、言語の觀念的部分に對する修飾關係の種々相に就き一亘り考察してみたのであるが、この外に文法的部分に對する修飾關係がある。如何なる言語にありても、先づ原理的に觀念的部分と文法的部分とに分釋することができる。言語が文法的言語として發達してゐる以上は、必ずこの兩部が何等かの形で存立してゐるのである。文學はかゝる兩對部の認識に於て成立し、且かゝる兩對部の理論的透徹の方向に進まなければならぬ。殊に論理的文法にありては、どこまでも此の兩對部を直接その眼前に据ゑ、その組織化、體系づけを圖らなければならぬのである。しかして日本語ではかゝる兩對部の相互關係は、如何なる要素單位に於ても、先行するものはより觀念的であり、後行するものはより文法的であるといふ原理性に支配されてゐる。それは辭とか語とか節とか、句とか文などと言つたものに分析し或は綜合されても、常にかゝる兩對部の相關が見られるのである。かやうな兩對部の中、觀念的部分、乃至は先行的部分に對する修飾關係は略々前述の如きものであるが、修飾關係には斯く觀念部に對するもの以外に、文法部に對するものがなければならぬ。觀念部的修飾關係とも言ふべきものに對し、文法部的修飾關係と言ふ如きものがなければならぬ。

文法部的修飾關係といふのは如何なることであるか。それは言語の文法部、即ち文法力の發現する部分に對する直接的な修飾關係でなければならぬ。文法事實を被修飾素の重心とせる修飾關係でなければならぬ。文法事實といふことは如何なることであつたか。之を一言にして言へば言語の斷續法である。詞の切れつゞきに關する法格である。言語活動に於ける粗密波の連續斷止の種々相である。文法部的修飾關係といふものは、かやうな言語の斷續地點に係るものと考へなければならぬ。言語の斷止點と連續點とを、被修飾素の重心とする修飾關係と考へなければならぬ。それは如何なることであるか。文法部的修飾關係は先づ言語の斷止點に係るものと、言語の連續點に係るものとに區別して考へることができる。前者に於てはその後行素が一先づ完結せる言表であり、かゝる完結言表の全體性に對して行はれる修飾關係は、換言すれば文に對當する修飾關係であるから、之を文對當的修飾關係などと稱することができる。然るに後者の方はそれに反して、その係る地點が言表發展の中道である。即ち前を承け後を起す楔石の如きものである。言語の種々なる接續の地點を被修飾素の重心とするものである。故に之を接續的修飾關係とも稱することができる。しかし之を更に仔細に觀察すれば、單なる前承後起の中間に挿入せられる底のものではなく、何れかと言へば後に起り來る要素に先行する意味のものと考へなければならぬのである。挿中ではなく矢張一種の挿頭である。接續助詞の如きものは先行後行兩要素の持續關係を指標し、しかも常に先行素に下接することによつてそれが行はれるのであるが、之はそれに反して、後行素に上添することによつて行はれるものである。接續助詞添加は脚結的であるが、之は挿頭的である。

文對當的修飾關係には種々のものがある。それらの中、先づ陳述作用に係る性質のものと、情意作用に係る性質

のものとを區別しなければならぬ。勿論陳述作用に係ると言つても、單に繫辭的なものにのみ係るといふ意味ではなく、そこには種々の表決乃至表情的なものを混入してゐるのである。只それらの中心點が陳述作用であり、情意的なものはその縁量の如きものとなつてゐるのである。又情意作用に係るものでも、それは單に呼掛とか感嘆とか願望とかといふやうなものにのみ關係するものではなく、敘述言表の如きものにも關係するのである。只中心とするもの、直接に關係するものは何處までも情意作用であり、陳述作用に對しては、かゝる情意的關係を介してのみ關係する意味のものでなければならぬ。

以上の如くであるから、陳述作用に係る性質の文體當的修飾關係を陳述的修飾關係、情意作用に係る性質のものを情意的修飾關係と稱することができる。しかして接續的修飾關係と共に文法部的修飾關係の三つの大綱と考へることができる。



陳述的修飾關係の被修飾素は、各種の陳述作用によつて統一せられたる陳述的機構であり、修飾素は之に先行す

る陳述性の屬性觀念を具する從屬語である。随つて陳述性の從屬語と陳述素との兩者が相呼應して、その陳述的諸内容を抱擁し種々雑多な敘述の様相を構成するものであると考へてもよい。それらの中、敘述が單に終結して行く形のものゝと、敘述が一旦結了し更に後行する敘述に接續して行く形のものゝとがある。しかして前者にも後者にも亦種々のものがあるのである。そこで先づ前者から考察して行く

敘述が終結して行くものゝ中で、第一に區別しなければならぬのは斷言的なものと疑問的なものである。斷言的なものゝ中にも種々に分類を施すことができるのであるが、煩雜に流れる嫌があるから、此處ではそれを只列舉的に眺めて行くこととする。先づ

決して惡意は持たぬ。　さら／＼そんな事實はない。

絶對につき合ふまい。

いさ知らず。　えせじ。　つゆ思ひ申さず。

つや／＼忘れず

の如きものは打消的なものである。それは「ぬ」「ない」「まい」或は「ず」「じ」等の如き打消助動詞で表示された打消的陳述を、「決して」「さら／＼」「絶對に」或は「いさ」「え」「つゆ」「つや／＼」等の如き從屬語を以て修飾することにより、打消的修飾關係ともいふべきものが成立してゐるのである。又

必ず参りませう。(必ず参ります)

是非お役に立てませう。(是非お役に立てます)

きつと返しませう。（きつと返します）

の如きものは決意的なものである。即ち表意的助動詞「う」によつて表された決意的陳述を、「必ず」「是非」「きつと」等の如き陳述性の從屬語を以て修飾したものである。（但し、「う」とか「よう」とか、文語の「む」などといふ表意的助動詞を添加しなくても決意、豫想となり得る）次に

既に幕が切つて落された。 すつかり終つた。

終に功成り名遂げた。

の如き完了的なものがある。それは完了の助動詞「た」などによつて表示された完了的陳述を、「既に」「すつかり」「終に」等の如き從屬語を以て修飾することによつて、完了的修飾關係とも言ふべきものが成立してゐるのである。

又

どうぞおかへし下されたい。 どうぞおかへし下さい。

何卒よろしくおたのみ申します。

の如き願望的なものがある。即ち希望助動詞「たい」成は願望の意味を有する動詞によつて表された願望的陳述を、

「どうぞ」「何卒」などの如き願望的な陳述性の從屬語を以て修飾したものである。或は又

多分明日の中に定まるだらう。

おほかたその邊のところだらう。

恐らくそんなことはあるまい。

の如き推量的なものがある。それは「だらう」「まい」等の推量助動詞の如きものによつて表された推量的陳述を、「多分」「おほかた」「恐らく」などの推量的な從屬語を以て修飾することによつて、推量的關係とも言ふべきものが成立してゐるのである。又

恰度山でも崩れるやうだ。

恰も霞のたなびけるが如し。

の如き比況的なものもある。即ち「やう……………」或は「如し」などによつて表された比況的陳述を、「恰度」とか「恰も」などといふ從屬語を以て修飾したものである。

以上は斷言的なものであるが、之に對し疑問的なものといふのは次の如きものである。

何故そんな無理をいふか。 どうしてそれができないのかね。

なんで命が惜しからうか。 いかにおしのぎですか。

何ぞその言の悲痛なる。 いづくんぞ求めんや。

なぞや戀しき。 など郭公こゑたえぬらん。

即ち疑問の助詞「か」（文語では「や」「ぞ」も）或は係結關係によつて疑問的陳述作用となつたものを、「なぜ」「どうして」……等の疑問の從屬詞を以て修飾するのである。しかし、口語では

何故そんな無理を言ふ。 いかにお暮しです。

どうしてそれが出来ないのだ。 なんで命が惜しからう。

の如く、被修飾素である陳述機構に何等疑問的工作の施されていないものもある。又之等疑問的修飾關係は反語法を形成するものであるが、文語の「あに………」(や)「いかで………」(や)の如きものは殊更その爲のものとして行はれるのである。

次に敘述が一旦結了し更に後行する敘述に接續して行く形のは、種々の條件を示す條件的修飾關係とも稱すべきものである。之には

若し私共が退却してしまつたら、今後の報告はどうなりませう。

もし假睡せば夢も亦綠ならむ。

の如き假設的なものと

たとひどうならうとも、かまふものか。

よし死んでも、國の爲なら名譽この上もないことである。

よしやこの身は八裂にされようとも、白狀は致さぬ。

かゝる老法師の身には、たとひうれへ待りとも、何のくいか待らん。

よしの川、よしや人こそつらからめ、はやくいひてしことは忘れじ。

の如き假容的なものとの區別がある。しかして、その何れもが假設的或は假容的な意味の從屬語を以て、接續助詞「ば」「とも」「ても」の添加その他によつて條件形となつた陳述を修飾するものである。

情意の修飾關係の被修飾素は言表の情意面であり、修飾素として之に先行するものは從來感動詞などと稱せられ

たものである。之には種々雑多なものがあるが、感情的なものと意志的なものとに區別して考へることができる。

前者は例へば

あゝ、うれしい。

あゝ、落ちさうだ。

あゝ、はづかしい事を申しました。

えゝ、くやしい。

おゝ寒い。

はて、こまつた。

まあ、綺麗なこと。

あら、面白の景色や。

あはれ、今年の秋もいぬあり。

あな、かしがまし、花も一時。

うたて、露けき草枕かな。

の如く、種々の主觀的情緒を放出する性質のものである。後者は例へば

おい、車屋さん。

やあ、しばらく。

さあ、立て。

そら、進め。

こう、聞きな。

こら、待て。

もし、あなた。

これ／＼、しつかりしろ。

うん、さうだ。

えゝ、きつと行くわ。

はい、今すぐに。

ねえ、さうでせう。

いで、目にも見せむ。

いざ、明日故郷に歸らむ。

の如く、呼掛誘引應答等の對他の意向を放出する性質のものである。

接續的修飾關係の被修飾素は言語の接續地點を主眼とするものであり、その修飾素として先行するものは從來接續詞と稱せられたものである。之にも種々雑多なものがあるのであるが、その係る接續地點により、語又は節相互の連續に關するものと、文又は句相互の連續に關するものとに區別することができる。しかして前者は例へば

筆か又ベン　陸軍又は海軍

古事記、日本書紀及び萬葉集　金閣並に銀閣

向島さては上野　山或は川へ行く。

山又山を越え行けば、　一尺即ち十も

不義にして富み且貴きは、我に於ては浮雲の如し。

などの如きものである。後者は例へば

山を越え、又水を渉る。　歌をよみ、そのうへ詩を作る。

學問もあり、さうして智慧もある。

わたしは出掛ける。就いてはあとの事をたのむ。

春になつた。しかしまだ氣候が寒い。

尙逢つてからもよくお話しませう。

それでこそ我々の裡に永遠の幸福の希望が生ずるのである。

だから言はぬことか。

だけれどそれも一片の空論に過ぎない。

然れども余は一々之を駁するの愚をなさず。

但し婦人はこの限にあらす。

かくて之を横濱に輸送せり。

などの如きものである。

九

敘上の如き修飾關係によつて、雑多な觀念語の範疇づけを設計することが可能である。一體、修飾關係といふことは嚮に述べたやうに、被修飾素の觀念内容を構成する種々の屬性中、然るべきものを抽出して、修飾素添加によつて之を限定し明示せんとする言語の構造關係である。随つてこゝに觀念内容の複雑な語或は單純な語等種々ある場合、それらの間に成立する修飾被修飾の關係は大略次の如くである。

一、觀念内容の單純なるものは常に觀念内容の複雑なるものの修飾素として從屬して行く。

二、觀念内容の複雑なるものは如何なる場合と雖も觀念内容の單純なるものの修飾素として從屬することができなう。

三、觀念内容の單複度が同位的であれば其の修飾被修飾の關係は相互的である。

觀念内容が複雑であるとか、單純であるとかといふことは如何なることであるか。觀念内容が複雑であるといふ

のは、觀念としてそれが未分的であるといふことであり、多數の内潜的屬性によつてその觀念内容が形成せられてゐるといふことである。之に反して、觀念内容が單純であるといふことは、或決定的な屬性が直ちにその觀念内容であるといふこと、觀念内容が外顯的分出的であるといふことである。随つて前者は可限定的狀態であり、後者は既限定的狀態である。前者は被修飾的であり、後者は修飾的である。觀念内容の複雑な語ほど修飾さるべき要素として適合し、觀念内容の單純なる語ほど修飾するための要素として適合してゐる。つまり觀念内容の複合度と、その語の修飾機能とは逆比例關係にあるのである。修飾素として先行する可能性のより大なるものは、觀念内容のより單純輕少なるものであり、被修飾素として後行する可能性のより大なるものは、觀念内容のより複雑重厚なるものである。より觀念的に行過ぎ分剝的なものはより修飾素的であり、より觀念的に落着し總體的なるものはより被修飾的である。

しかし、こゝで觀念内容の單複といふことは、勿論只觀念内容そのものに就いて無制限的に然考へて行くのではない。觀念内容の單複といふことを只抽象的に考へれば、之を種々様々の角度から眺めることが出來、又無限に停止するところなき内容分析を施すことも出来る。しかし、斯くの如きことは言語を考へる上に於て無意味な業であるばかりでなく、却つてその正當なる認識を混亂せしめる結果となるのである。言語理法的領域への論理學的的心理學的試行の氾濫に外ならない。そこに、制限的な節度がなければならぬ。つまり言語事實的な枠に蔽へられた、單複の度でなければならぬ。觀念内容が何等かの言語的表示形態と相補的に相制するところに、眞にこゝで言ふ意味の觀念的單複といふことが考へられるのである。しかしてかゝる觀念内容の單複性に對應すべき最も顯著な言

語的表示形態は、即ち種々の修飾關係であると考へるのである。修飾關係に於て、修飾素として先行するものは、比較的單純な内容の觀念であり、被修飾素として後行するものは比較的複雑な内容の觀念である。修飾關係は、語の觀念内容性、或は觀念的次元とも言ふべきものゝ構造的表示である。故にかゝる修飾關係構造を指標として、觀念語の眞の意味の觀念的性格を抽出品等することができるのである。觀念語の修飾被修飾の相關々係を能記的縁とし、之に對應すべき觀念内容の形相乃至は本質といふものを把握することができるのである。しかしてかやうな語の觀念性ともいふべきものが、其の機能範疇に對して有力な手懸となり、基準となるのである。觀念性の識別は、觀念語範疇の先鋒である。以下かやうなことにつき少しく考察を加へてみよう。

修飾關係に於て觀念語は、常に修飾素として他の要素に従屬先行する性質のものと、然らざるものとに大別し得ることに就いては已に論述したことがある。前者は副用的伴示的な從屬語でめり、後者は主用的自用的なる獨立語である。觀念語に於て、かゝる區別を夙くから考へてゐたのが樺井道敏や富士谷成章である。殊に成章は從屬語を挿頭と稱し脚結から明瞭に獨立せしめ、この一類の本質を眞に把握してゐたものと言はなければならぬ。然るにかやうなことも長い間一般に理解されずに今日に至つてゐたのであつたが、山田孝雄博士は之を顯揚せらるゝに及び、漸くその價值ある學說であることが認められるやうになつたものである。しかし、從屬語獨立語兩者の中にも亦種々のものがあるのである。先づ從屬語の方から考へてみる。

從屬語の中には、被修飾素の觀念内容を修飾限定する性質のものと、被修飾素の觀念内容を統括する文法力を修飾限定する性質のものとある即ち、觀念部的修飾關係の修飾素となるものと、文法部的修飾關係の修飾素となるもの

のである。例へば

遙かに遠い。　ぞろ／＼ついて来る。

最も大きい。　もう澤山だ。

の「遙か」「ぞろ／＼」「最も」「もう」の如きものは前者であり、

決してそんなことはない。　なぜそんなことを言ふか。

たとひ美しくても、ひ弱いのでは役に立たぬ。

あゝこまつた。　おゝ來たか。

しかしおれは屈伏しないぞ。

だがそれも一片の空論に過ぎない。

の「決して」「なぜ」「たとひ」「あゝ」「おゝ」「しかし」「だが」の如きものは後者である。前者は觀念的從屬語、後者は文法的從屬語とも言ふべきものである。從屬語は一般に言主の主觀性を表示する傾向の語であるが、觀念的從屬語は主觀性とは言ひ條それは物の屬性を包有するのである。然るに文法的從屬語は眞に言主の主觀性を表示するものと言ふべく、觀念語としては最も原始的にして、低次的な觀念内容を具する一類と言はなければならぬ。

右二類の從屬語の中にも、亦それ／＼異なるものがあるのである。先づ觀念的從屬語と稱するものに就いて述べてみよう。之には觀念内容を狀態的に修飾限定する性質のものと、觀念内容を程度的に修飾限定する性質のものがある。例へば「遙か」「綺麗」「する／＼」「ぞろ／＼」「茫洋」の如きものは前者であり、「最も」「多少」「稍」「も

つと」「もう」の如きものは後者である。前者は狀態的從屬語、後者は程度的從屬語とも言ふべきものである。かやうな區別は山田博士によつて已に爲されたものであり、博士は之を情態副詞、程度副詞と稱して居られるのである。しかしして前者の中に更に二別を認めて居られる。それは「靜かに」「徐に」「懇に」の如く助詞「に」を伴なふ性質のものと、「する／＼と」「はる／＼と」「ぬつと」の如く助詞「と」を伴なふ性質のものとである。漢語から借用したものに於ても又同様區別あるもので、例へば「活潑に」「精密に」「明白に」「滑稽に」「切に」「優に」「忠に」「孝に」「敏に」の如きものは前者に屬すべきものであり、「繽紛と」「淋漓と」「茫洋と」「聯綿と」「超然と」「泰然と」「忽焉と」「溘焉と」「確乎と」「突如と」「莞爾と」「瞠若と」「得々然と」「斷々乎と」「寂と」「漠と」の如きものは後者に屬すべきものである。博士は之等に對し別に命名して居られないが、前者を觀念的、後者を外貌的と言つて居られる。蓋し、前者の觀念内容は抽象的內面的觀想的であり、後者の觀念内容は具象的外面的寫實的であるからであらう。一體、この兩者の屬性内容と形容詞の屬性内容を比照してみるに、前者は「美しい」「大人しう」「淋しう」「懷しう」などの如き志久活用と略、同様であり、後者は「赤う」「高う」「長う」「堅う」「苦う」「若い」などの如き久活用と略、同様である。即ち「に」添加の從屬語は志久活形容詞の觀念内容と對應的であり、「と」添加の從屬語は久活用形容詞の觀念内容と對應的である。形容詞に就いては又觸れる機會があるであらうが、要するに前者は情緒的であり後者は感覺的である。前者は外的刺激に對する情緒的反應を内容とするものであり、後者は感覺的反應を内容とするものである。故に私は「に」を伴なふ性質のものを情緒的從屬語、「と」を伴なふ性質のものを感覺的從屬語などと稱するのである。この狀態的從屬語の二別に對し、程度的從屬語にも二別を認める

ことができる。例へば「もう少し」「ほんの僅か」などの「少し」「僅か」に對する「もう」「ほんの」の如きものである。しかし、之は事實的には極く輕微なものである。又狀態的從屬語の中、情緒的なものにも感覺的なものもそれ／＼二別を認めることができる。前者には例へば

靜か——↓靜けし 遙か——↓遙けし

明か——↓明けし のどか——↓のどけし

の如く、形容詞の形に轉化し得るものと然らざるものとがあり、後者には例へば

茫洋たり 超然たり 躍如たり

の如く、形式動詞と合體し得るものと然らざるものがある。

次に、觀念的從屬語に對立する文法的從屬語に就いて述べよう。之には先づ單に後續部に先行し、その文法的統括力を修飾せんとする性質のものと、その上更に先行的なるものを承接する性質のものとに區別することができる。即ち文對當的修飾關係の修飾素となるべきものと、接續的修飾素となるべきものとである。前者は「必ず」「決して」「あゝ」「おゝ」「まあ」「そら」の如きものであり、後者は「又」「しかし」「だから」の如きものである。前者を文對當的從屬語、後者を接續的從屬語などと稱すべきものである。文對當的なものを更にその修飾するものによつて二つに分けることができる。即ち「必ず」「決して」の如く陳述作用に對して修飾する性質のものと、「あゝ」「おゝ」「まあ」「そら」の如く主觀的情意を修飾する性質のものとである。随つて前者の觀念内容は陳述的であり、後者の觀念内容は情意的である。故に前者を陳述的從屬語、後者を情意的從屬語と稱するのである。しかして前者

は

陳述的從屬語

終結的從屬語……………
斷言的從屬語……………
疑問的從屬語……………
條件的從屬語……………

の如く種々のものに分れて行き、後者も

情意的從屬語

感情的從屬語……………
意志的從屬語……………

の如く種々のものに分れて行くのである。又接續的從屬語にも、語とか節とかといふものの接續地點に用ひられる傾向のものと、句とか文とかといふものの接續地點に用ひられる傾向のものとがあり、而してそれらの中に又種々雑多のものがあるのである。

+

從屬語に對する獨立語は、修飾關係に於て如何なる範疇づけを受けるであらうか。先づ屬性觀念を表示する性質のものと、實體觀念を表示する性質のものとに區別することができる。前者は後者の修飾素として

白い月 美しい湖 行く春 歸らぬ父

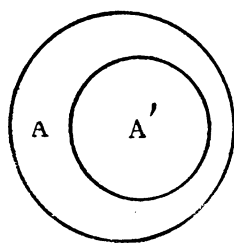
の如く從屬することが可能であるが、後者は前者の修飾素として之に從屬することは絶対に不可能である。勿論、

後者は前者の補充素とし従属することができる。例へば

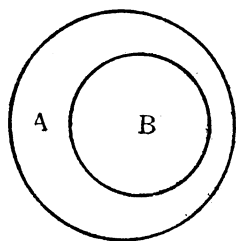
雪よりも白い あれより美しい

本を読む 下に置く

の如きものである。しかし。それは



の如き修飾関係ではなく



の如き補充關係に外ならない。蓋し、屬性觀念を表示する性質の語と實體觀念を表示する性質の語とを、その觀念内容の單複度といふ點から比較するに、前者はより單純であり後者はより複雑であるからであらう。前者は未完的な分刻的乃至は動搖的觀念であり、後者は完成的な統括的乃至は閉止的觀念である。かやうな點から屬性語、實體語などといふ如く區別してもよいのであるが、嚮の從屬語も屬性の語であるから、統合關係などから來る特性によつて前者を陳述語と稱するのである。

陳述語は更に、その屬性觀念の内容が狀態性的のものと現象性的のものとに分れる。しかして前者は後者の修飾素として

白く光る 美しく塗る 堅くなる

の如く從屬することができるのであるが、後者は前者の修飾素として從屬することはできない。前者は普通に形容詞と稱せられるものであり、後者は動詞と稱せられるものである。形容詞には更に「白く」「赤く」「青く」「臭く」「甘く」「苦く」「辛く」「痛く」「暑く」「寒く」「強く」「弱く」の如く、一般に感覺的と稱せらるべきものと、「美く」「悲く」「淋く」「嬉く」「懐く」「戀く」「弱々しく」「しま／＼く」の如く、一般に情緒的と稱せらるべきものとがある。前者は所謂久活用、後者は志久活用のものに略々該當するのである。しかして何れかと言へば前者の方が後者に先行する傾向が強い。動詞には尙更種々の範類があるのであるが、之は補充關係に於て區別せらるべきものであり、修飾關係では只

あひ成る うち破る おしつける

かき曇る　くり返す　さしこもる

の如き別を考へ得るに過ぎない。又陳述語に對立する實體語にも種々のものがあるのであるが、修飾關係に於ては何れも同格的である。

以上で日本語に於ける文法語に對立する觀念語に就き、修飾關係と稱する文法事實の分類を以て範疇づけてみたのであるが、勿論かやうなことは餘りにも粗笨なる試みであると考へられるかも知れない。しかし機能範疇といふことは單なる論理學的範疇でもなければ、又外形的に語を彙類することでもない。種々の文法事實の中から自然的に成立して行く、最高次の範疇でなければならぬ。故に修飾關係の如き廣汎なる文法事實群を以て、雑多な語彙を一應檢證し之を尺度づけることは、機能範疇論上穴勝無價値な作業とは言へないのである。殊に修飾關係は前にも述べた如く、觀念内容を生命とする觀念語の觀念的地位を決定するものである。觀念語相互の本質的位格を決定する尺度である。觀念的方向に行き過ぎ分析的抽象的なもの程、先行的從屬的であり、觀念内容が飽和的であり統括的具體的な程、後行的獨立的である。例へばイエス・ペルセンの説く *ranks* の考の如きも、かやうな修飾關係の如きものを根幹としてゐるのである。所謂 *junction* を基として考へてゐる。即ち *a very beautiful lake* とか *a furiously barking dog* の如きものは *junction* であるが、その最後の名詞 *lake, dog* などは主要概念を表す部分であるところから之を *primary word* と稱し、それに先行してゐる *beautiful, barking* などの形容詞或は動詞は第一次の主要概念を修飾限定してゐる要素であるところから之を *secondary word* と稱し、更にそ

れに先行する副詞 very, furiously などは第二次の要素を修飾限定してゐるところから tertiary word と稱するのである。しかし之を The lake is very beautiful. 或は The dog barks furiously. の如く所謂 nexis としても、動詞の終止形が用ひられてあつたり語順が變換されたりして形態上相違があるが、その Three ranks には何等變動を來さぬものであるとするのである。そこに ranks と word-classes との間に必然的な對應を求めて行かうとするのである。(Otto, Jespersen; The philosophy of grammar. London 1924. chap 7) イ・ス・ペルマンのかやうな ranks の説には勿論全幅的に賛意を表することはできないが、私が今こゝで言ふ修飾關係と機能範疇との對應の如きものを考へる上に極めて示唆に富むものと信するのである。例へば

(五次語)	(四次語)	(三次語)	(二次語)	(一次語)
と	遙かに	遠く	飛ぶ	雁

の如く考へることができる。しかし一次語は實體語、二次語は動詞、三次語は形容詞、四次語は狀態的從屬語、五次語は程度の從屬語の如く範疇づけて行くことができる。只陳述的從屬語、感動的從屬語、接續的從屬語等はかかる ranks の外にある別次元的のものである。

かやうにして更にそれ／＼のものの中に微細な觀念的性質を區別し、そこに雜多な觀念語の觀念性的形相の體系を考定することもできると思ふ。しかしそれは決して意義論とか語彙論とかといふものに墮する意味のものではなく、文法形態をそれ／＼然るべく能記的事實とせる文法學的領域内のものと考へなければならぬのである。しかし、右の ranks の考の如きは修飾關係の半面・即ち觀念部的修飾關係と稱するものに觸れてゐるに過ぎない。修

飾關係には文法的なものが外になければならない。文法事實を直接的に修飾限定する關係事實がなければならぬ。即ち陳述作用を修飾するもの、情意的なものを修飾するもの、連續關係を修飾するものなどがなければならぬ。故に單なる修飾關係を以て、觀念語の機能範疇を考定する如きことも、*ranks* の考などよりも一段と廣い領域に出てゐるものと言はなければならぬのである。かやうな意味に於ける觀念語の機能範疇の概略を一括して示せば次の如くであらう。

